日中戦争の発火点になった盧溝橋事件（1937年7月7日）から80年。泥沼化した戦況から抜け出せないまま、中国からの撤兵を拒否した日本は、米国との対立を深め、4年後、対米英戦に突入する。そして敗北した。日中戦争とは何だったのか、歴史家の秦郁彦さんに聞いた。（聞き手　笹森蒼樹）

――盧溝橋事件をどうとらえていますか。

「日本側はともあれ、中国側のイメージが変わってきた点に注目したい。50年目にあたる1986年に、盧溝橋の現場で戦った中国軍の大隊長（金振中）の証言が公開されました。それまで中国側は、国民党政権の史観を継承し、日本軍の計画的陰謀と主張してきたのですが、それが否定され、中国軍兵士による偶発的発砲であることが明らかになりました。つまり、局地の小紛争として収拾できたのに、相互の誤認と不信によって、全面戦争へ拡大してしまったのです」

――盧溝橋事件の実情が知れると、五分五分の責任論になりかねません。それ故に、中国としては、公定史観を見直す政治的必要性が生じたのでは。

「そう思います。だから私は、80周年に、新しい公定史観を打ち出すかなと注視していました。すると、一昨年の政治局会議で習近平主席が提議し、今年1月発行の国定教科書の記述で、戦争の呼称をそれまでの『8年抗戦』から『14年抗戦』に改めたのです」

「つまり、抗日戦争の起点を、37年ではなく、教科書ではほとんど無視してきた31年の満州事変（9・18事変）に変えたわけです。中国共産党が国民党（台湾）史観の継承から脱し、自前の国定史観を確立しようとしていることが読み取れます」

――日本でも、満州事変から終戦までを15年戦争と呼ぶ人が少なくありませんね。

「もう10年以上前になりますが、15年戦争論者の一人が中国の学会で、中国も同調するよう説いたら、賛成者が多かったと、うれしそうに語っていました。ただし、正確には13年11か月なので、中国の研究者は15年ではなく、14年戦争と言い換えたのでしょう」

「ともあれ、満州事変は、関東軍による自作自演の鉄道爆破から始まったことがよく知られており、弁護の余地がないだけに、中国が日本を責める新たなカードにするかもしれません」

――天皇陛下が戦後70年の2015年の年頭に際し、「満州事変に始まる戦争の歴史を十分に学ぶことが大切」と述べられています。

「満州事変への関心が薄れかけていただけに、私も陛下のさりげない感想に接して、はっとしました。関連して想起したのは、昭和天皇の明察です。盧溝橋事件の10日前、一触即発の日中関係を憂慮し、中国国民政府へ思いきった譲歩をするため、前例のない御前会議を開こうとした故事のことです」

「このときの焦点は、蔣介石を中心とする中国の統一を認め、華北分離工作を停止することにありました。昭和天皇は、衆望を担って首相に就いたばかりの近衛文麿、華北工作の中止を唱えていた外相の広田弘毅、参謀本部作戦部長の石原莞爾らの知略をまとめ上げれば、避戦の見込みがあるかもしれない、と判断したのでしょう」

「しかし、内大臣の湯浅倉平、元老の西園寺公望まで伝えた段階で、盧溝橋事件が発生し、不発に終わります。日中戦争を回避する最後の機会を逃したのは惜しまれますが、昭和天皇の勘の良さには感銘します」

――問題は満州事変の成功体験に味をしめ、華北を第二の満州国にともくろんだ対中強硬派の策動ですね。

「現場の支那駐屯軍は不拡大方針ですが、関東軍や中央の強硬分子は、事あれかしの一撃論に傾きました。参謀本部作戦課長の武藤章は、事件の第一報に『面白いことが始まったね』と反応し、上司で不拡大論の石原を突き上げ、3個師団の派兵を承知させます。近衛首相も広田外相も優柔不断。石原が『南京に飛んで蔣介石と話し合ってくれ』と要望しても、動きませんでした」

「蔣介石も、日本政府や軍部への不信感を強め、ドイツの和平仲介を断り、徹底抗戦を決意します」

「日中ともに全面戦争を望まないままに、ずるずると泥沼の長期戦にはまり込みました。宣戦布告もなかった支那事変は、1941年に対米英の大東亜戦争に吸収され、支戦場ながら、終戦まで100万の日本軍がくぎ付けになります」

――図らずも国民政府は、第2次大戦の戦勝国に列しますが、直後から、国民政府と共産党の内戦が再発。49年に中華人民共和国が成立し、共産党が漁夫の利を得た形になりますね。

「毛沢東主席は、訪中した日本の政治家や元軍人が、謝罪を口にすると、『日本軍が国民政府軍と戦って撃破してくれたお陰です。むしろ、感謝したい』と答えています。共産党にとっては国民政府打倒が最優先でしたから、毛発言は本音でしょう」

――これからの日中関係についての展望は。

「文化大革命後の中国は、混迷と停滞が半永久的に続くのではないかと思わせましたが、その予想は外れました。90年代以降の中国は、高度成長路線をひた走り、今や米国と並ぶ世界のスーパーパワー（超大国）になりました。この奇跡的な現実を、先入観抜きに評価すべきでしょう。体制は違いますが、自己改革による成熟に期待しつつ、つかず離れずのクールな友好関係を維持したいものです」

日中戦争 誤認と不信で拡大

盧溝橋80年 「偶発」前提 中国が史観変更

山岸直子撮影

歴史家 秦郁彦（はたいくひこ）氏 84

日中戦争研究の第一人者。大蔵省勤務を経て、米プリンストン大大学院客員教授、拓殖大、千葉大、日大教授などを歴任。著書に『日中戦争史』『盧溝橋事件の研究』など。

盧溝橋事件 1937年7月7日、北京郊外の盧溝橋で夜間演習中の日本軍に、中国第29軍が射撃を加えたのをきっかけとした武力衝突。11日に現地で停戦が成立したが、近衛内閣は同日、内地3個師団の華北派兵を決定。日本軍は7月末、北京を占領した。翌8月、戦火は上海に飛び火し、日中両軍の全面戦争に拡大した。

華北分離工作 満州事変の成功体験を経た日本陸軍は、次いで河北省など中国の華北・内蒙古の5省を、蔣介石の国民政府から分離し、親日的な地方政権を樹立しようと画策。1935年、冀東（冀は河北省の別称）防共自治政府を誕生させた。

日中戦争関連年表

日中戦争	1931年9月	柳条湖事件。満州事変始まる
	32年3月	満州国建国
	33年3月	日本、国際連盟から脱退
	5月	日中、塘沽（タンクー）停戦協定（長城以南に非武装地帯設定）
	35年11月	非武装地帯に冀東防共自治委員会発足（翌月、「政府」に改称）
	36年12月	西安事件（張学良が蔣介石を監禁し、抗日を要求）
	37年7月	盧溝橋事件。日中戦争始まる
	8月	第2次上海事変
	12月	南京陥落
	38年1月	第1次近衛声明（国民政府を対手とせず）
	11月	第2次近衛声明（東亜新秩序建設）
	39年7月	米国、日米通商条約廃棄を通告
	9月	第2次大戦始まる
	40年9月	日独伊3国同盟調印
	41年12月	日本、対米英開戦
	45年8月	終戦

編集委員が迫る

拡大中国 旧陸軍を想起

15年戦争と呼ぶにしろ、14年戦争と呼ぶにしろ、満州事変から昭和の戦争は始まった。満州事変から盧溝橋事件までの間、日本陸軍が進めた華北分離工作は、華北をも奪おうとしている、との中国の警戒心を高めた。盧溝橋事件が偶発的に起きたにせよ、起こるべくして起きたといえよう。

「弱い支那」は、一撃を加えれば屈服するはずだという一撃論といい、日本は中国をなめていた。それから80年後の中国は、強大な国家に変貌し、こわもての相貌すら見せる。強引な海洋進出を見ると、昔の陸軍を見る気がする。

（笹森）